学齢期のADHD（注意欠陥多動性症候群）児童への対人関係構築のための支援

永岡　孝亮

１、研究の目的と方法

近年､発達障害という言葉をよく聞くようになった｡発達障害には主に広汎性発達障害、LD、ADHDなどの障害が挙げられる。本研究で学齢期のADHD児を取り上げた理由としてADHD児はその障害の特性が影響して他者との関係が上手く作れないということ、そして学齢期では対人関係が上手くできないということが原因となって、不登校やいじめにつながる例もあり、より問題が深刻になっている。そしてこれに向けた支援が必要だと考えたため、あえて学齢期の児童を取り上げた。研究方法は文献からADHDの診断方法、特徴など調べ、次に文献と愛知教育大学特別支援教員養成課程で行われている発達障害児の運動教室の事例から対人関係のつまずきを取り上げ、どのような支援方法が有効かを文献とからめて考察する。

２、ADHDという障害

定義：「ADHDとは、年齢あるいは発達に不釣合いな注意力、及び衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で社会的な活動や学業に支障をきたすものである｡」(文部科学省)

診断方法：一般的にDSM－Ⅳ－TRが使われている。これはADHDの特徴である不注意、多動性、衝動性の３つから行動特徴を基準にして行われる診断である。

〇学齢期のADHD児の特徴

学齢期では多動性が席を離れたり、動き回ったりするなどの行動に表れる。また感情のコントロールガ未熟であるため衝動的行動が誘発されやすい。４年生以降になると障害特徴について児童自身も理解し始めるようになり自己肯定感が低くなるということも新たな問題として表れる。

３、学齢期のADHD児の対人関係における困難

ADHD児はその主症状である不注意、多動性、衝動性が原因となって対人関係においてつまずくことがある。

〇多動性が対人関係にもたらす影響

・事例①通常学級に在籍する１年生A君。

多動性：教室を出歩く、飛び出すなどの行動が見られる

→クラスメートが「困った子」という印象をもち始めている。

〇衝動性が対人関係にもたらす影響

・事例②特別支援学級に在籍する１年生B君・事例③通常学級に在籍する４年生T君

衝動性：自分が思ったとおりに行動できないとパニックになってすぐに気持ちを落ち着けることができない。その際に友達にも暴言や暴力を振るってしまうこともある。

→周囲の友達からわがままな子と思われる。あるいは怖がられてしまう。

〇不注意が対人関係にもたらす影響

・事例④通常学級に在籍する３年生O君

不注意：忘れ物が多い、身の回りの整理整頓が苦手。友達との約束を間違えたり、忘れたりする。→担任からの注意が増える。友達とのトラブルが絶えない。

〇障害児運動教室（愛知教育大学特別支援教育教員養成課程）での３年生Y君の事例

・多動性：じっとしていられず順番を待つことができない。
・衝動性：勝負で負けるとカッとなってしまい、気持ちを抑えることができない。暴言を言ったり、相手を叩こうとしたりする。
・不注意：タオルを回すなどして説明が聞けない。次にやる活動が正確には分からない。

４、ADHD 児の良好な対人関係を構築するための支援

〇援助の基本

１、認めること、ほめること　２、視覚的情報の利用
３、ゴールが見えやすく、目標が明確　４、楽しいこと

〇環境整備

・教室の中や廊下に課題が終わった後読書やワープロなど児童が興味をもつことができるコーナーを用意する。
・シールやメモ用紙を活用し、評価を細かくしたり、作業手順を明確にしたりする。

〇自己管理スキルを育てる

ワークシートを使って一定時間ごとに自身の行動を振り返る。教師が援助しながら児童が自分の行動の良し悪しを判断できるようにする。悪いところだけでなくできるようになったところも評価できるようにしておくことで児童の自信の回復につながる。

〇ソーシャルスキルトレーニング

ソーシャルスキルトレーニングで重要なのはこれまで学習してこなかった行動や不適切に学習してきた行動を新しく適切に学習していくこと。また学齢期の児童ではゲーム性を持たせるなど楽しみながら自分の感情をコントロールし、状況に合わせて相手の気持ちを思いやることができるようなソーシャルスキルトレーニングが有効。大人数ではなく、まずはペアなど少人数での取り組みが必要。

５、まとめ

本研究を通して学齢期の ADHD 児がもつ対人関係における困難をそれに対する支援を考察してきた。文献と運動教室の事例から対人関係における困難はその背景に ADHD の障害特性である不注意・多動性・衝動性があることが分かった。支援方法としては通常学級でもそれほど教師の負担にならずにできる範囲のものをあげていった。個別支援も大切であるが、通常学級に在籍する ADHD 児が集団での生活になじみながらよりよい生活を過ごすことができるように教師が支援をしていかなければならない。支援方法をいくつか挙げたが、これはほんの一例にすぎず、教師は児童が障害と向き合いながら成長を促すためにそれぞれの児童にあった支援を常に考えていかなければならない。

●引用・参考文献

・近藤文里「ADHD 児に対する心理学的理解」（障害者問題研究　第 30 巻第 2 号 pp108～116、2002 年）
・上野一彦「LD＆ADHD　４月号」pp,24～27、2003 年
・「通常学級における AD／HD の指導」pp,40~41、pp,47~53、pp,71~74、pp,112~114、2003
・佐藤慎二「通常学級の特別支援　今日からできる！40 の提案」pp,53~74、pp,93~115、2008 年
・中根晃「ADHD 臨床ハンドブック」pp,11~35、pp,123~135、2001 年